
【全年齢版】好きです、付き合ってください。

透凪真白

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【全年齢版】好きです、付き合ひてください。

【著者名】

NZノード

透田 真白
透田 真白

【あらすじ】

可愛らしく顔立ちでふわふわの茶髪、猫つ毛の彼は、学校でちょっとした有名人。そんな彼から告白をされました。どうしてだろう。だって私は、女なのに。同性愛の言葉が作中出できますが、直接的な描写はありません。当作品はボーイズラブではございません。ご了承ください。 ムーンライトノベルズにて連載中の同タイトル作品の全年齢版になっております。同じ作者の作品なので無断転載ではございません。

第1話（前書き）

「こちらだけ読まれていた方は、お久しぶりで『ごめんな』ます。お待たせ致しました。楽しんでいただけましたら幸いです。

「好きです、付き合ってください」

お決まりの文句を言われ、はあ、と短く反射で声を発した。
どうしたものだらうか。目の前の光景は実に信じ難い。というよりも、信じなくて良い。と、誰かが告げている。いや、私の頭には特に何も住んではないが、いわゆるあれだ、自分会議というか。そのようなものだ。

昼休みに呼び出され赴いたのは人気のない校舎裏。ここまでくれば大抵の人間はどんな用向きか察しはつくのだが、目の前の人間を前にして、それはありえないだらう、と結論を下した。

それは私自身が異性に好意を示された事が皆無であるからだと、容姿、人格共にごくごく一般的かそれより多少下ではないかと自負しているからであるとか、高校2年生にもなつて発した言葉の意味を正しく理解していないほど純情であるとか、そういう私自身の問題で結論を下したわけではないとどうかご理解いただきたい。

緊張した面持ちで私を見つめる彼、在籍クラスはどこか忘れたけれど、同学年の佐藤昴君。

接点は恐らくほとんどないだろう。同じクラスになつたこともなければ、何かの係で同席した覚えもない。どういうきっかけで私を知つたか。そういう細かい事はひとまず置いておこう。

何故、私が彼を知つているか。

それは、彼が学校内の有名人であるからだ。

「……じゃあ、帰りはいつしょにかえろ?」

「へつ」

頭の中で色々と整理していたらば、目の前の彼が満面の笑みでそ

んなことを発言してきた。

おや、どうしたことだろう。なんだか彼がひどく輝いて見える。頬を染め瞳を潤ませ、まるで乙女のようにはにかんでいる。この瞬間を写真に収めたならば、男女問わず買ってくれそうだ。佐藤プロマイド、一枚いくらだらうか。儲かるだらうか。

「それじゃあ、またあとでねー。」

嬉しそうに手を振つて去つて行く彼に慌てて声をかけよつとしたが、驚きのが勝つて、これは最初の返答で男女交際を承諾したとされているなとわかつてはいたのだが、私はそれほど真剣に呼び止める事をしなかつた。そもそも、彼も本気なわけではないのだから、誤解をといてあげようと親切心を發揮してやる氣にもあまりなれなかつた。

だつて彼は、男性しか愛せない人間であるはずなのだから。

ふつむ、と顎に手をやりながら私は校舎へと戻る。あまりぼんやりしていると、昼食を喰いつぱぐれる可能性がある。正直、空腹をほつておいてまで挑むべき疑問ではない。

図書室へと戻れば、すでに弁当を広げている友人が興味があるのか、戻つて来た私に話しかけてきた。

「佐藤君、なんだつて？」

当然くるであろう質問に、私は困った顔でお弁当を広げつつ、首を傾げた。

「うーん……わかんない」

期待はずれな私の答えが不満だつたらしく、ぴくり、と片眉を上

げ、ふうん、と声をあげる友人に、付き合ってくださいとは言われたんだけど、と正直に話した。すると友人はよほど驚いたのか、口をあんぐりと開けて固まつた。なんとも珍しい姿である。

数秒待つてもそのままなので、食欲旺盛な私は友人の弁当箱にあるワインナーへ手をつけた。律儀にタコ型になつていてそれを見て、友人の母はちょっとした所で芸が細かいな、と感心する。全体的に女子のお弁当といった風情でとても可愛らしい。自作している私の今日の内容はのり弁当だ。弁当屋に並んでいたら美味しそうにうつるだらうが、女子高生のそれとしては少々彩りが少ないかもしない。

戦利品を口に含んで咀嚼した所で、やつと我に返つた友人は私を無言で睨みつけると一気に冷氣をあびせてきたがさもありなん。絶対そうだとは言わないうが、所詮この世は弱肉強食、と断言してしまつた人もいたではないか。

とはいえた好奇心が勝つてやらかしてしまつた悪戯。さらに怒らせたくはない相手を怒らせてしまつたのは事実。私が無言で卵焼きをさしだせば、友人はころりと機嫌を直した。

「……でも、それってありえないでしょ？」

まだおかげが入つた状態のまま喋るのは少々行儀が悪いが、話の流れを切つてまで今それを指摘する必要性を感じなかつたので私は心に留め素直に頷いた。

「まあね」
「千絵子はなんて返事したの」
「そこ」

友人の質問に、私はか、と目を開く。

そう、つまりはそれが問題だ。先程たいした問題じゃないと一蹴

したがそこはそれ。空腹の前には瑣末な事柄であつたがもりもりと腹を満たしていけば冷静な思考も戻るというものだ。相手が本気でないにせよ、承諾してしまつた以上面倒な方向へ転がる可能性は高い。

難しい顔をして弁当を貪りつつ説明すれば、なるほど、と友人が頷いた。

「つまり、なんとなく声出したらそれがイエスという意味にとらえられた、と」

「そう、それ」

「変なところで抜けてるのよね、あんた」

苦笑して私の頭をやんわり叩く友人の大人びた表情に一瞬見惚れながら、この友人はとても美人なのである、私はほんやりと考える。とにかく、告白がまがいものであるのは間違いない。だからこそを指摘すればいい。そうすれば私は解放されるはずだから。

解放。はて、私は一体全体何にとらわれたというのだろうか。首を傾げながら物思いに耽る私は、とりあえず食べちゃえれば、といつ友人の声に反応して食事を再開した。

先程の友人との会話でわかるとおり、佐藤昂氏のそういう恋愛観は、実は学校中に知れ渡つている。なぜかといえば、ある日ある女子から告白をされた佐藤君が、につこりと微笑んで「僕は男性しか愛せないからごめんね」というお断りの返事をしたのである。

それから新たな噂が流れ、どうやら佐藤君は同じクラスの幼なじみである男にずっと懸想しているらしい、と知つてから、一部すきものの女子はそれに興奮を覚え、その他の人間も変に面白がつて学校全体がそのふたりを応援する図が成立してしまつている。

「……あれ、てことは私は邪魔者になるのか？」

昼食を終え歩く廊下で、腕を組みつつ眉間に皺を寄せる。

学校全体の敵にも成り得てしまう状況に、私はちょっと心穏やかではない。ひょっとするところは思った以上に深刻なのだろうか。これはあくまでも仮定だが、たとえば、たとえば何か、私に声をかけねばならぬ事情があった。私ではなくても良かったのかもしれない。とにかく、異性に告白せねばならない窮地に佐藤君が立たされてしまつたとしよう。そうして、告白された私が、「いいよ」と、誤解にせよそやつて返答してしまつたという事実が今はある。当然、佐藤君はお付き合いをするしかない。みずから告白したのに、了承されて手の平を返すのはおかしな話だからだ。

そもそも、断られる前提だったのかもしれない。全校生徒が噂を知っているのだから、断られると思うか、疑問を呈すだろうと予想するのが普通だ。ひょっとすると、想定外の結果に私以上に彼が狼狽しているかもしれない。

そこまで思い至つて、なんとなく悪い事をしてしまつたか、と気になつた。

いや、多分この場合、悪いのは佐藤君になるのだが、のっぴきならない事情があるのならば私はそれを聞くくらいの了見は持ち合わせている。気はそうそう短いほうでもないし、今現在私に想い人がいないのも一因だ。誤解されて困る相手がいなければ、焦る必要もない。

ひょっとすると、好きな男性に何か言われたのかもしれない。へんな賭け事でもしたのかもしれない。あるいは。

とにかく、現段階ではあれこれと思考を広げすぎても仕方がない。ある程度の想定をして準備をし、彼の話を聞こうではないか。

教室に戻つて席に着いた私は、そういう方向性で話を纏めていた。

「^{のだ}野田さん」

放課後の教室にわざわざ迎えに来てくれたらしい佐藤君を見て、クラスメイトが不思議そうな顔をそれぞれ私に向けてくる。今まで接点など何もなかつたのだからそれはそつだ。

佐藤君は、とても可愛らしい顔立ちと茶髪の柔らかい猫つ毛から、どこかなにかの動物を連想させる。背はそれほど低くもないが、見た目通り性格もひととなつこい雰囲気があるからか、皆に愛でられている傾向がある。

恐らく、彼が同性愛者であると公言しなければ、もつと頻繁に告白をされていただろうし、女性をしげぎてはなげ、なんてことも出来ただろう。本人がそれを望むのかはわからないが。いや、男性だって、付き合いを了承するひとはたくさんいるかもしない。

そんなしようもないことを考えつつ、名前を呼ばれ無言で彼の前まで歩いていくと、佐藤君は微笑みながら私の手を取つた。

少し驚いて身体を強張らせると、田の前の佐藤君が表情を曇らせた。

彼に動物のような尻尾が付いていたならば、きっとじょほん、と萎れていたに違いない。泣き出しそうな顔をしつつ、弱弱しい声で私に問いかける。

「嫌だった……？」

哀しそうなその声に、私は無言で首を振る。そもそも、強く拒絶する理由も見当たらない。別に私は彼を嫌いではないし、手を握るくらいで頬を染めるほど男性を意識してしまつわけでもない。

それでも、解せないのはこの行動だ。

嫌々付き合つていいのなら、こんなことするのだろうか。私の言動に一喜一憂するのだろうか。それとも、これもなにかの条件で、演技をしなければならない理由があるのだろうか。

考えつつ辿り着いた昇降口で、靴を履き替える。つながっていた手が離れて安堵の息を吐き出したということは、なんだかんだ多少

緊張していたということだらうか。心に余裕が出来た所で、私は口を開いた。

「佐藤君」「なあに？」

相変わらず微笑んだまま、靴を履き替えた私の手を再度取る佐藤君。こうやって異性に触るのは、彼は嫌ではないのだろうか。

「まあちょっと謝罪しておきたいんだけど。私はあなたとの付き合いを了承したつもりはないの」「え？」

「そもそも、佐藤君は私が女性だと知ってるはずでしょ？あなたは異性を恋愛対象として見れないんじゃないの？」

無言で固まる佐藤君を前に、私はとりあえず頭の中であれこれ考えていたことを口にしてみる。

「私、佐藤君が言ったことにびっくりして思わず声あげちゃったんだけど、それを勘違いして了承の返事にとっちゃつたんだよね？それは謝罪させて、「めんなさい。ただ、何か事情があるんなら、聞くのはかまわない。罰ゲームとかで告白しなきゃいけなかつたとかそういうのなら、今すぐこの場で終わらせよう。好きでもないのに付き合つたりするのは苦痛だらうし、佐藤君が好意を寄せてる人に色々と誤解されたら嫌でしょう？」

伝えたいことをとりあえず伝えて、彼の反応を待つ。すると何かを思案しているように顎に手をやり黙り込んだ佐藤君は、しかし一分もからないうちに顔を正面に戻した。真剣な表情で私をみつめる。

「わかった。本当は……何も言わないでおこうと思っていたんだけど、それは卑怯だよね、『ごめん。覚悟して事情を全部話すよ』

真剣な表情になつた彼につられて、私は『ぐく、と睡を飲み込んだ。

「でも、ここでは話せないから……場所を変えよう

頷きながら私は彼にひかれ歩き出す。しかし、やっぱり手は離さなくていいのかな。私は気になつて訊ねると、そのまままでいいんだ、と微笑んで答えられた。

ひょっとして、事情とやらの理由も含まれてこるのだろうか。少しうずく好奇心が、多少彼の言葉を急かすけれど、話してもうえることにはかわりはないのだから、と無言で彼と帰り道を歩いていた。

第2話

季節は初冬だけれど、今日は春のように暖かい。小春日和というのは、一体いつからいつの言葉であつたかわからないから、心の中で使つたらいけないなわかんないし、なんて思つていたら、目的地に着いたらしい。少し前を歩く佐藤君の足がぴたりと止まつた。

見れば、なんの変哲もない公園だった。遊具もそんなには多くないからか、夕日がぽつかりと浮かぶ空のこの時間帯にはもう子どもはいなかつた。カップルが訪れるにしてはまだ早いかもしれない時間で、つまりは誰も居ない空間のベンチに、すすめられるまま私は隣りあわせで腰かけた。

離された手を一瞬視界に留めてから、佐藤君へと視線を向ける。佐藤君は、正面を向いてなにやら考え込んでいた。

恐らく今は声をあげないほうがいい。彼の言葉をじっと待つた。

「……知つてた、んだね」
「？　は」

ほつ、と呟かれたその意味が一瞬わからなくて、思わず短い返事のような声を発してしまう。そんな私の曖昧な音に困つたのだろう。疑問符を浮かべた顔でこちらを見てくる佐藤君に少し慌ててごめん、と返した。

「意味がわからんくてだね。ええと、知つてたとは？」
「あ、そういう喋り方が素なんだね。そっちのほうがくだけた感じで僕は嬉しいな」

いや、今そんな話じゃなかつたはずですけど…?と、思わず脳内でつっこんでしまつたが、口に出していないから問題はなかろう。

確かに、先程は少々気取った話し方ではあったろう。けれどもほぼ初対面でありながら巻き込んだ責任感からなのか、彼は私に重大な何かを話そうとしてくれている。それならば、私も本来の姿で臨むのが礼儀であろう。と、思わなくもない。

いいや、単に勝手に素うどんな私が出ただけである。言つててうどんてなんなのだろうか、とやはり自身に問い合わせたが、所謂その場の勢いであって、深い意味はないよ、と回答された。そうですか、わかりました。

夕日に照らされる空を一瞬見上げ、美味しそうな色である、と食欲ばかりに結び付けたがる思考を少々叱りつつ、私は佐藤君へと向き直った。

「素とか素でないとか、今は置いとかんかね?とりあえず、さつきの。どうこう意味なの?知つてたんだねって何が?」

私の言い様にしょぼんとしながらも、再度の質問に佐藤君はああ、と頷く。

いや別に、本当の私なんて知らないくせに、とか素とか素でないとかそんなの知らないよ、とかそんな風に思つっていたわけでは決してないんだ。そんなに情けない顔をしないでくれまいか。悪い事をしてしまつたみたいだ。ただ、目の前にぶらさがつたままの疑問を優先させてしまつただけなのに。言い方が少しきつかつたろうか。

ああ、と言つてから、彼の言葉がどうにも続かないでの、私はぱたぱたと左手を上下に振つた。あらいやだ奥さん、とかおばちゃんがやつてる仕草そのものだ。それにたいして別に若人である私はなんら抵抗を感じない。ちなみになぜ左手なのかと言つたら私が右、佐藤君が左側に座つたからだ。

「あのさ、佐藤君。別に私は言われて憤慨したわけではないのだよ?ただ、さつきの言葉が気になっちゃつただけでさ。この喋り方が

お気に召してくれたんなら私としても気が楽だよ。かしこまんなくていいってことなんだし」

わはは、と笑い声も付けながら言えば、佐藤君は萎れたしつぽをぶんぶんと振り出した、よう見えた、実際に彼の尻から尻尾が生え出したわけではない、ので、私は安堵の息を吐く。
というわけで、仕切りなおしだ。なんだかなかなか先に進まないではないか。

「知つてたんだって言つのは、僕の恋愛対象が、その」

言い淀む佐藤君の言葉を引き継いで、私は声をあげる。

「同性愛者？」

「……知らないんだと思ってた」

「学校内で知らないひとはいないと思つけど」

苦笑する彼に、私は頬をかく。どうしてそんなに、まいつけたなあ、つて顔をしているんだろう。でもそうか。といつことは、彼は私が佐藤君が男性が恋愛対象であるつてことを知らないと思ってたわけだ。そして今、彼はその事実に直面してどうやら困つている。何かを隠したまま、私とお付き合いを継続させたかっただろうか。それは一体なんだろう。きっと、その理由はこれから話してくれるのだろうけれど。

そんな事を思つていたからだろうか。佐藤君が意を決したかのように正面に向いていた顔をじちらにぐるり、とまわしてきた。

近くで見ると、やはり整つた顔をしている。その整つた顔は今、私を真剣に見つめているのだと思うと、妙な緊張感が生まれてきた。
□元を注意深く見つめていれば、元々ゆっくりとだつたからなんか私の目の錯覚だったのかはわからないけれど、佐藤君が唇を開く

瞬間がまるでスロー・モーション映像のように私の瞳にはうつった。

唇の形すら、綺麗だ。

やう思つたのと、彼の声が耳に届いたのは同時だった。

「わからないんだ」

「え？」

反射的に聞き返すと、佐藤君はまた正面を向いてしまつた。ああ、私は彼の可愛らしい顔を真正面から見たいとどこかで思つていたようだ。無意識下の自分に少し驚く。

「僕は、本当は女性が苦手なだけなんじゃないのかなって。ひょっとすると、男性が好きなんじゃなく、ある種の恐怖症のよ'りになつてゐるかもしねない」

佐藤君の告白に私は目を丸くする。ええと、それはつまり。

私は頭の中で考えを整理していく。

女性不信、女性恐怖症。女性に嫌悪感を抱く。まあ、とりあえずなんでもいいが、そういう感情を女性に抱きがちな男性がいたとしよう。しかしそれじゃあ、その男性が同性愛者なのかといつたら、それはまるで違う話になるだろう。それは、女性に当てはめれば何かのきっかけ、たとえば某かの行為、痴漢であるとか、で、男性全般が恐怖の対象になつてしまつた。として、その女性は同性愛者か？やはり違うと言えるだろう。

私たちは、まだ16、7そこそこの小坊主、小娘、俗っぽく言えばガキ、である。と同時にとても多感なお年頃だ。不安定で、思い込みも激しいところがあるし、まだまだ自分の考えに確固たる何かを見出せる年齢とはとてもではないが言い難い。そんな我々が、そういう感情を勘違いしてしまつ事は、決して有り得ない話ではなかろう、との時私は結論を下した。

でも、どこで私は疑問を抱いた。

「あの、気分を害さないで聞いてほしいんだけども。今現在の想い人って、あくまでも噂だけれど、同性の幼なじみなんでしょう？その人の事は、どうなの？佐藤君は好きじゃないの？そつじゃなくとも今まで好きになつた相手は？」

私の質問に、佐藤君は特に不快感を抱かなかつたようだ。顎に手をやり、そこなんだ、と声をあげる。

「僕は、ずっとそういう思い込んでいたから、幼なじみの事もそういう対象としてみていると思ってた。でもね、少し前に言われた一言で、僕は何もかもわからなくなつた」

「ほほ。その一言とは一体なんぞや。心で呴いたすぐあと、彼から答えが返つてくれる。

「お前が俺に抱く感情は、友情とどう違うんだ、って」

「！ほ、それはそれは」

「……とにかく、言い返せなくて。思えば、恋人同士するような事を今まで好きになつた人たちとしたいと思つてなかつたかもなつて」

恋人同士でするような事。

その一文を聞いて頭の中を流れたあれやこれやは、まあ外れてはいないんだろう。そういうことを、佐藤君は今までしていないということが。

私も誰かと交際した経験がないからわからないけれど、きっと好きな人とはそういうった行為もしたくなるのだろう。自然と、求める心も生まれてくる、はずだ、恐らく。

物質的な何かを求めるのは、そもそも若ければ若いほどそういう衝動は大きいんじゃないのだろうか。男性側は特に。わからないけれど。さっきからわからぬけど言い過ぎていいけれど。

戸惑いつつも、好奇心からなのか。私は気付けば口を開いていた。

「キスとかもあまりしたいと思わないっていつこと、またはしたことがない？」

さすがにこれには答え辛かつたんだろう。一拍置いてから、佐藤君が見る見る頬を染めていった。瞳を潤ませて戸惑うその表情は、そんなつもりがなくともなんだか変な気分になる。別に私はどこぞの中年ではないのであるが。可愛すぎる君がいけないんだ、という男前なセリフが私の脳を突き抜けていった。もちろん、声に出して言つほどハッピーな人間ではない。

「その、したことは……」
「ー、あるんですね」

なんか若干変な言葉遣いだけど気にしてはいけない。動搖が隠しきれなかつたのかもしれないし、単に興味津々になってしまったのかもしない。案外私も野次馬根性が盛んであったのか。

真っ赤になつてうつむく可愛い男の子にどうしたらいいかわからずじばらく無言でいたが、やがて佐藤君はぽつぽつと軽く呟くように話してくれた。

「その、なんていうか、僕からとこよりも向こうから半ば無理やりつていうか。その時も、気持ち悪いまではいかなかつたけど、かといって良くもなくて。手を繋ぐくらいで十分だと思えたし、それもたまにじやれあいみたいのがあればそれでいいな、って」
「ああ……なんか男子つてたまにアグレッシブな遊びをやってのけ

てますのう、そういうえば

なるほどなるほど、と頷きつつ、彼の言葉を聞く。そうか、それならば確かに……微妙、といえるかもしない。いや、男性を愛する気持ちはあるが、ひょっとすると女性も特別に無理、というわけではないのかもしれないという可能性もある。つまりはどちらも、という人々。そこらへんは詳しくわからないけれど、いずれにせよ、佐藤君が言いたかつた真実を大体把握できた。出来た、けれども。はて。

「……私は、なぜあなたと付き合わなければならんの？」

首をこじこん、と傾げつつ佐藤君の方を向く。
私の言葉に佐藤君がば、と俯いていた顔をあげる。興奮状態なのが、立ち上がって何かを言おうとした、矢先。
私のお腹が、暴君の如く癪癪を起こした。

「……とても元気な腹の虫だね」

佐藤君が気を遣つて言葉を選んでくれる。でも、その綺麗な顔は引き攣つっていた。私は気にせず自然に微笑んでみせる。

「優しい言葉をありがとう。……ふむ、現在時刻は17時。暗くなつてきたしそろそろ帰るか場所を移動するのがよろしかりうて」

「？ 移動」

「腹が減ると人間それを最優先させる傾向にあるから、どうにも思考が短絡的になつていけない。であるから、空腹は満たすべき。真剣な話し合いをする前ならば尚更。というわけで佐藤君、この後の『予定は？』

とくとくと語る私に、面食らつたのだらつ。田を丸くした佐藤君は、立つた状態のまま勢いを失つて困惑いの表情を見せた。

「いや、特にあつません」

多少情けない声音になつてゐる。なんだか申し訳ないが、田下、最優先事項はこの腹減りをどうにかすることである。

「お家で誰かが」飯を用意していたりは

「いや、僕の家、両親共働きで、母親がけつこう作り置きしてくれてはいるんだけど、今日は外食用のお金をもひつてゐるんだ」

「それはそれは。ではおこでませ

「？　おこでませ、つてど！」

佐藤君の問いかけに、私は微笑んだ。

野田という表札が出ている一軒家。所謂住宅街にあるそれは、ごくごく平凡なものだ。しかし私の隣に立つ男の子は、それをとても珍しい何かのようにまじまじと口を開いてみつめていた。なんだかその反応がおかしくて、笑つた。

「佐藤君、固まつてないで入りなよ

「……えつ、いやでも

「別に遠慮しないでどづや。誰もいないから

「ええつ！？」

私の返答に更に驚く佐藤君。なんなのだらつか。とにかく私は早くの空腹をどづこかしたいのだ。

「いいからほら。タダメシ食ひつつからでは手伝つてもうかりやう気にしなさんな。早くはやく」

「あ、おじやま、します」

私の言葉に觀念したのか、觀念といつも言葉もなにやらおかしいが、佐藤君は戸惑いつつも玄関へと足を踏み入れた。

リビングに通して、少しだけ待つよつに告げれば、私は一階の自室へと足を運ぶ。

少し急いで着替える。いつもの部屋着だ。料理するのに格好を気にするのは良くない。佐藤君はもう私の中でお客様つていつ立ち位置でもないから、外見を気にかけても仕方がない。

少し早足で階段を駆け下りて、ごめんね、と佐藤君に一声かけると、佐藤君が固まった。予想はしていたけれども。

「……それ」

「中学校時代のジャージ。便利だよ、汚れても気にならないから。ほれ、これをお使い。ブレザーは脱ぎきんしゃい、動き辛いだらうか」

「ら

四人がけのダイニングテーブルの上にあつたエプロンを佐藤君に投げてよこせば、彼は慌ててそれを受け取つた。よしよし、言つとおりに装着しましたね。

「佐藤君、料理の経験は」

「『めんなさい、ほとんど……』」

「謝りんでようじ。覚えておくと便利よー、今は男も料理作れるとポイントが高いーらしー」

「…………野田さんは、料理作れる男のが好き?」

佐藤君の質問に私は腕をまくつて手を洗つてうーん、と声を上

げる。特にそうだからってわけではないけれど、まったくしない人や、家事労働に抵抗のある人よりもやつてくれる人が良いのは確かだ。特に偏見かもしれないけれど、男のするものではない、と言つている種類の方は、日々のお礼を怠る傾向がある気がしてならない。たとえ全く手伝つてくれずとも、美味しいよ、ありがとう、といつ言葉の威力ははかりしない。私は、物心ついた時から毎日当たり前のように家事をこなしているけれども、正直、両親の感謝の言葉がなければ、もつとひねくれていたと思うのだな。

そんな事を頭の中で反芻する家事労働と交えつつ考えながら、私は頷く。

「そうだね、私はいつもにやつてくれればかなり嬉しいな」

「ー、僕でも出来る」とつてなにかな、なにしたらいい?」

佐藤君がブレザーだけでなくネクタイも脱ぎ捨てて腕まくりをした。急にやる気を出してどうしたことだろうか。でも非協力的よりずっと嬉しい。私は微笑んでそれじゃあ、と口を開いた。

「あーあー、そんなに正確じゃなくていいんだよ、要は食べやすいやいいんだから」「そういうものなの?」

「そうそう。こうやって一回切る、とこぐるっとまわして

「そうやって切るんだあー!」

見本に横でにんじんを切つてみせるだけで、佐藤君は感嘆の声をあげる。なかなかどうして良い生徒だ。微笑ましい思いで私は佐藤君の手元を見やる。

「うん、うまいうまい。あ、にんにくは苦手?」

「ー、ううん、むしろ好き

「よかつた。じゃああとは、サラダ作つてもうらおうかな？」

「はい！」

大変良いお返事ですね。

「『めんねー、ぜんつぜん凝つた料理でもなんでもなくて。でも』
飯はガーリックライスにしたから一手間かかってますよ…」

「いや、十分だよ！ カレーって久しぶりかも」

「サラダは個人的な趣向で『モザサラダ』にしました、召し上がれ」

「へー、これって『モザサラダ』って言つんだ。いただきます…」

『モザサラダ』。本当は黄身だけ使うんだけど、私はもつたいないので白身もじつしょに使います。美味しいよ。

サラダとカレー。なんてことない食卓だけれど、やつぱり誰かと向き合つて食べるには美味しい。両親は別に子供にも無関心な親つていうのでは全然なくて、いつも私を気にかけてくれるし時間を少しでも作ってくれようとはするけれど、出張も多いし夜は遅い事がほとんどだ。だからせめて健康的な食生活を、とふたりのぶんのお弁当も作っているし、それが苦痛ではないけれど、それでもやつぱり寂しいって感情はどこかしらあるもので。

「佐藤君の家も、『両親忙しいんだ？』

「うん。最近は家政婦を雇おうかみたいなことも言ってたかなあ

「へえ……」

「なんとかやってくれよつとましてたけどそろそろ限界みたい。僕もかまわないよつて言つたから、近々そういう人が来るんじゃないのかな」

「そんなんだ。じゃあお母さんの料理食べれなくなるのちょっと寂しいね」

「うーん、そうだね。でも、両親にそこまで無理もさせたくない

から、そう我儘も言つていられない。僕は野田さんみたいに家事を一手に引き受けるとか、そういうことも出来なかつたんだから、やつぱりしようがないかな」

口ぶりから、どうやら佐藤君の家も特にご両親と険悪な状態といふわけではないみたいだ。それでもやはり、仕事が忙しければどこかしら心に空間は出来るもので、なんとなく、私たちは空氣でそれを感じ取つた。お互いにどこか照れ臭くて、誤魔化すように微笑みあつ。

「片付けは僕がやるね。」ちと遅になつた御礼に

「あやー、そらありがたい。悪いねえ。なんなら明日のお弁当とか作ろうかい？」

「それじゃあきらかに僕のが御礼が足りないんじゃないかな

「そうかねえ？食器を洗つた上に拭いて棚にしまつてくれたらとんとんになるんじゃないかな

「それはそこまでしたら作つてくれるってこと？」

「別にかまわんけども。ただかわゆらしいのは作れんよ。ザ・弁当みたいなのが作れんよ

「なにそれ

笑う佐藤君につられて私も笑つ。ひとしきり久しぶりの人と食べる晩ごはんを楽しんだ。

それから私はお弁当作りを、佐藤君は後片付けをそれぞれやって、無事佐藤君に完成品を渡し、お茶でも飲むかー、とふたつマグカップを用意した、ところで何かを忘れているような気がした。

「……千絵子さん

「ほつ！？」

マグカップに牛乳を注いでいたところで背後から呼びかけられ、とても間抜けな声をあげてしまった。ああこれお茶ではないけれどお気になさらず、とか口に出しつつも、なんだか少し動搖している自分がいる。

一体全体なんだといつのだらう。どうか圧力のよくなものを感じなくもない。冷たいシンクに手をついた彼は、背後から私を囲うようにしている。これでは牛乳が温められない。レンジの前に移動させてくれ。

しかし私の願いもむなしく、佐藤君はそのままの態勢でそう呼んでいい?と訊ねてきたので、お好きにならってください、と私は返答した。

「ねえ、千絵子さんは、た。こんな簡単に誰も居ない家に男の子を上げちゃうの?」

「ん?んや。そんなあばずれみたいな真似はしないよ?」「あばずれって」

私の言ごとがおかしかったのか、背後でくつくつと笑い声が聞こえる。

「さつきの話を聞いてはいたけどもさ、でもふたりきりになつたところで別に佐藤君が私をどうこうすると思えなかつたし。だつて女の子が苦手なんでしょう?」

「問題は、そこなんだ」

「? わい」

佐藤君がシンクから手をビカしてくれたので、私は背後にはいる彼得向き直った。振り向けば思った以上に近かつたその距離に多少狼狽する。顔、けつこいつこのですね。

「どうして付き合わさつ必要があるのか。千繪子さんばかりは別に話したね」

佐藤君の言葉に、私は頷く。

それを見届けたからか、佐藤君はいつかいまばたきをすると、すつと口を開いた。

「僕の女性への苦手意識を、払拭する手助けをしてくれないかな。
その為にも、僕と交際をしてほしー」「ほほほつ

「……ほほほつ」

「名ばかりの恋人、といつわけじゃない。つまりは、公園で話していたように、恋人同士がするようなことを、僕としてほしいんだ」「それは、ええと

「うん、手を繋いだりとか、あの、キス、とか」

あまりの出来事に面食らっていたのかわからないが、私はもう一度ほほう、と呟いていた。

といふか、そんな、頬を赤らめて言わないでほしー。そこいらの女の子より美しい。

そういえば、先程一回した佐藤君のまばたきは、とてもとても綺麗だった。

まあ、どうでもこことだけれど。

まず、頭を整理しよう。しかし、今の私には何かが足りない。はて、それはなんだろうか。そう考えて、私はひらめいた。

糖分である。

私はひとり納得して頷くと、牛乳入りのマグカップを持ち上げれば、佐藤君に声をかけて通してもらい、すぐ傍にあるレンジへとふたつのそれを放り込んだ。熱々にしたいので操作盤を押して、3分温める。カツブームンが出来る時間と同じだ。

「……行動の意味を訊いてもいいかな」

背後から聞こえてくる静かな声に振り向けば、じつとこちらを見つめる佐藤君。腕組をして私に理由を問うている。私はどうしてそんな質問をされるのかわからなくて、目を丸くした。

「当然でしょう。今の自分には理解出来ない事を言われたの。糖分が足りないからだよ！あ、佐藤君も飲むでしょ？ココア」

「……ぶつ」

私の答えの何がそんなにおかしいのか、佐藤君がついに声を上げて笑い出した。

何をそんなに笑う事がある。だって理解出来ないのに、腹は満たされておるのだから、足りないのは糖分であろう。脳にお砂糖、と言つではないか。

首を傾げて彼を見ると、私が疑問符を浮かべた顔をしているのがますますおかしかったのか、佐藤君は肩を揺らして笑う。

いや、ひょっとして、と思う事もあった。人よりも何かずれているところもあるうが、と。しかし、その言語はきっと些少なものだ

と今まで信じてきたりし、今現在もそう思つてゐる。けれども目の前の佐藤君の様子を見ると、つい数分前の行為は、大変面白いものであつたらしい。ふむ。

温め終わったのを知らせる音がリビングに鳴り響き、私はマグカップを取り出す。

スプーンでちよいちょいと張つてゐる膜を取り除き、ココアの粉を入れる。ぐるぐるとかき混ぜて完成。はい、と渡したら、私はリビングのソファへと腰を落ち着かせた。たすん、と隣を叩いて、佐藤君も隣に座るよううながす。

おや。なぜそこで目を細めてこちらを見やるのであろうか。首を傾げるも、佐藤君は特に何を発するでもなく、無言で私に倣つた。公園の時とは違ひ、今度は私の右隣に佐藤君が居る。

こくん、と一口飲めば、脳に糖分が行き渡る錯覚に陥つた。なんだから今なら良いこともひらめきそうである。思い込みだとしても、そういうつた気持ちは大事なはず、だ。

マグカップをテーブルに置いた音がし終わつたあと、私は一瞬呼吸を忘れた。なぜならば、物理的に呼吸を塞がれたからである。

綺麗な唇が、平凡な私の唇に吸い付いている。

触れるだけならばキスとか口付けとか、そんな言葉で済ませられるのだが、なんとなく、接吻という単語が私の頭を巡つた。意味合い的には同じであろうが、日本人だからだろうか。そちらのがより深い繋がりがあるような感覚になる。

あれこれと、ほんとうでもいいことを思考していれば、その間も無遠慮に佐藤君の唇は私の唇に好き放題触れ、ちろり、と覗かせた舌が私の下唇を舐めた。

びくん、と肩を跳ねさせて驚いてしまつた反射なのか、私は薄く口を開いてしまつた。それを待つてゐたのかはわからないけれど、佐藤君が私の後頭部に手をまわすと、そのままより深い口付けを私にほどこしてきた。

「む……ひや」「……」

名前を呼ぼうとしたけど無理だ。呂律が回らないどじりの話じゃない。息苦しい。ぴちゃぴちゃとなんだかいやらしさ水音まで耳に響いて、私の唾液だつたらなんか嫌だなあ、なんて思う。粘膜と粘膜が混ざり合つて、なんだか物凄く卑猥じやないだらうか。

それにしても。

恐らく先程私がキスと呼ぶようなものしか彼は経験していない口ぶりなのに、どうしてこんなに手馴れている様子なのだろうか。それとも所謂、接吻を経験済みなのか。

頭の芯が痺れる。何かを注がれているみたいに、ぼんやりと思考が鈍くなる。そこまでいったところで、佐藤君がゆっくりと歯を離した。

気付けば目には涙が溜まつていて、顔が熱い。息も苦しかったから、はふはふと浅い呼吸を繰り返す。

「……うつわ、やばい」

この時の私は、彼が何を呟いていたかなんて考えられなかつた。もし気付いていたならば、違う結末もあつたろうか、と後になつて考えたのだけれども、すぐにきっとそれはないな、と一蹴していた。やつと呼吸が落ち着いてきた私の頬に、佐藤君の右手が触れる。彼の手の平は、温かくも冷たくもなかつた。

「……真っ赤だね」

「真っ赤じゃないほうが良かつた?」

「ううん、可愛い」

ふふ、と笑つてそんな事を言つあなたのがよほど可愛い顔をしていると思うのだが。けれど今はそんなことどうでもいい。さすがに

「」は憤慨するタイミングだとわかつてているのだが、なんだか私はどうにもそういう気になれなかつた。なぜである。彼にたいして同情的であるからなのか。単に綺麗な彼の顔にまいつてしまつたからなのか。

なにしろ突然の出来事に驚いてしまつて、正しい、と言つとおかしな表現だが、反応が出来なかつたのもしかなかつた。

「ねえ、嫌だつた？」

佐藤君の言葉に私は考え込むが、生理的な嫌悪感はなかつた、と告げれば、正直な感想だね、と空氣で微笑む。「うん、他に思い浮かばなかつた。

「僕もね、嫌じゃなかつた。女の子に触れても、嫌じゃなかつたんだ」

「それは、良かつた、でいいのかね」

「うん、良いんじゃないかな？トラウマを克服するといつ意味では」

「……なるほど」

やつと思考が戻ってきた私は、ほんやりとしてソファに沈めていた身体を起こす。

「」めんね、突然。でも、千絵子さんさえ嫌じゃなければ、僕はこのまま千絵子さんと恋人同士でしか出来ない事をしたいんだ」「なんど。それはつまり、私で女の子に対する苦手意識をなくしたい」とことで相違ないね！？」

「うん、まさにやつことです」

ふむふむー何度も頷きつつ、私は援軍を送る心持ちでココアを飲む。

私の行動にあ、と気が付いたのか、佐藤君もいただきます、と言つて用意したココアに口を付けた。美味しい、と微笑む彼はやはりとても可愛らしい。

ひょっとして、私はこの顔にどこかしら弱味があるのだろうか。でなければ、いくらなんでもろくに話したこともない彼から接吻をされて憤慨しないのはおかしい。

私もあはずれであつたか。

多少悲しくなりながらも、ならば仕方ない部分もある、と納得する。本能は、しょせん何事にも勝るはずなのだから。

「……でも、何故私に？記憶が確かであるならば、私と佐藤君はまるで接点がなかつたのぢやないかね」

「だから。こんな事言つのはあれだけど、接点のある子にはそんな馬鹿正直に頼めないし、そういう噂に興味がなさそうな子に声をかけてみようと思つたんだ。単純だけれど、真面目そうな人の集まる場所つて図書室かなあ、と思って、そこでたびたび千絵子さんを見かけて。真面目すぎるのもやつぱり難しそうだけれど、お友達との会話を耳にしたとき、そのへんのバランスが良さそうだなつて勝手に思つたんだ。千絵子さんみたいな人なら、ある程度付き合つて、別れられるかなと思つて。ミーハーな子は後々大変そうだし

「おや、なかなかに辛辣なお言葉だね」

彼の事はまだまだわからないとはいゝ、今までの様子からしてらしからぬ発言に、私は目を丸くする。

佐藤君は、申し訳なさそうに首を竦めた。

「……ごめん。僕も、やけになつてたのもしれない。好きな人に気持ちを否定されて、ましてそんなことない、って言い返せなかつた自分自身が情けなかつたんだ」

「そう、か。うん、そうだね……」

もしも女性が駄目だと判明したならば、いや、むしろその方が、佐藤君にとつては幸せな結末なのかもしれない。だからこそ、彼にとってこれは大袈裟かもしけないが人生を賭した最大の勝負事なのだ。

お付き合い、か。ふうむ。現状、嫌だという感情は沸かないし、私は彼に対して同情心を抱いている。おまけに、行為も最後までは至らないと約束してくれているし。

流されてる感があまりに否めないが、ここまで話を聞いてしまって、無理ですかようなら、と言えるような強さも私にはない。操を立てる相手もいないのだし、どうにもそういう部分に深いこだわりが持てなかつた。

「でもさ、それなら周りには私と付き合つて言わないほうが多いよね。そのほうが何かと都合良いだらうじ」

「！ 千絵子さん……僕と恋人になつてくれるの」

返答に困を丸くした佐藤君を真正面から見据えて、私は頷いた。

「乗りかかった船つて感じだね。ただ、その、無理な行為は無理つて言うと思う。なるべく応えるようにはするけど。その、それでもいいっすか」

「そ、それは全然！ むしろ、僕が悪いんだし！」

慌ててそう告げた佐藤君に良かつた、と微笑めば、佐藤君も同じように微笑んだ。

「……あの、千絵子さん。もう一回、キスしても良い？」

「ほへ」

「さつきの、嫌じゃなかつたつて感情、勢いでパニッシュになつただ

けかもしれないから。冷静になつた今の状態で試してみたいんだ」

「ええと、そうか。あの、じゃあ、お手柔らかにお願いします？」

「どうして疑問系なの」

「なんとなく」

ふふ、と笑んだ私に了承を取れば、佐藤君はそつと私に近付いた。先程とは違つて、ゆっくりと綺麗な顔が近付いてくる。余裕が出来たからか、彼の顔をじっくりとながめられる。くつくりとした瞳の中が綺麗。伏せる睫毛も綺麗。私を驚かせた唇の柔らかさも、ついつきの事だから、よく覚えている。

ちゅ、と触れ合う音が耳に届いた。一回目には氣づかなかつた発見に少し感動しながら、私はゆっくりと目を閉じる。なぜ目を閉じるのか、体験するまでわからなかつたけれど、より相手を近くに感じたいからなのかもしれない。

視覚が奪われて、他の五感が冴えていく。触覚、聴覚。少しでも触れられればそのぬくもりを敏感に感じ取ることが出来る。先程とは違い、口腔内というよりも唇を味わうように、佐藤君はやんわりと私の唇を甘噛みする。その延長で、舌をちりり、と出して舐めたり、佐藤君の唇全体で挟まれて、吸われたり。

溶けてきた思考で、それが気持ち良ないと感じる。私つて、ひょつとして淫乱だったのかな。そんなことまで考えながら、ちらりと伸びる舌はどんな様子なのか見たくなつて、そろり、と瞳を開けてみる。

驚いた事に、てつきり閉じていた彼の瞳は、ぱっちりと開かれていた。

目を見開いた私に気付けば、瞳で笑つた佐藤君は、そつと私の唇を弄んでいた舌を離す。まるで私がそれを見たがっていたことを知つてゐるみたいだ。

ああ、やっぱり、綺麗。

ほんやりとそんな事ばかり思つていたら、佐藤君が微笑んだ。

「昂つて、そう呼んで」

「……え？」

「ふふ、まだほんやりしてる？かわいい」

頬に手を添えられて、優しい聲音でそんなことを言つ。私はそれがとても恥ずかしかつたけれど、同時に冷えた手の平が気持ちよかつた。いや、佐藤君の手が冷えたというよりも、私の頬が熱すぎるのだろうな。先程の行為のせいだと思ったら、なんだかますます温度が上がりそうだった。

私は何かを誤魔化すかのように、ちらり、と佐藤君を見やる。

「え、ええと、あの、す、昂君？」

「うん、そう呼んで」

わかった、と私が頷くと、佐藤君は再度微笑んだ。

それから、ココアをすべて飲み干して、佐藤君は帰つた。駅までの道がわかるのか心配だつたから、いつしょに行こうか、と言つたけれど、夜は危ないから、と断られてしまった。なんとも紳士的であると同時に、そんな風に女扱いされると、気恥ずかしい。パタパタと顔を扇ぎつつリビングに戻ると、携帯電話が振動する音が響く。静かにしていると、けつこう聴こえるものである。

私はポケットからそれを取り出せば、登録した覚えのない名前に目を丸くする。通話ボタンを押すと、そこからは先程まで話していた佐藤君の声が聞こえてきた。

『無事駅に着いたよ』

その言葉に、よかつた、と私が告げる。そういうえば、携帯電話の番号を教えてくれとさつき佐藤君が言つていたな。何か操作して私

の番号はわかつたから、と返されたから、まさかこちらに彼の番号が登録されているとは思わなかつた。佐藤昂といふ名前が、きちんと着信者名に出でている。

私は、彼の言葉に微笑んだ。

『そりか、それはよかつた。家までも、氣をつけて帰つてね』

『ありがとう。じゃあ、また明日ね、千繪子さん。これからよろしく』

く

その言葉にこぢらいや、と返事をして、電話を切つた。

台所へと足を運べば、片付けようと思つていたマグカップは、綺麗に洗われ、あるべきところに戻されていた。きっと、佐藤君がやつてくれたんだ。でも、いつの間に？

「……そりこえば、あんまり顔が赤いから顔を洗つてきたらどうだつて佐藤君に言われたな」

きっとその間に片付けてくれたのだろう。なんと、好青年である。気付けば私は、よくわからないかたちで終わらせてしまつた初めての接吻を、特に悪い記憶として残すことなく微笑んでいた。

携帯電話の番号とアドレスを交換し、けれど特別何かをやりとりしたわけでもない。果たして、お付き合いといつもの具体的にどういったものかと考えたけれど、そもそもがお付き合いといつものを正式にする必要がないのだということに気が付いた。

極端な話、女慣れする為に適度に私と会話をしたり触れたりすればいいわけで、特別に親しくする必要もないだろう。情がわけば、別れも辛くなるし、私にどつてもそのほうがいいだろ。

「……ん？あれ？」

今重大なことを心の中で呟いたよな。こんなことが過ぎるということは、ひょっとして私はすでに彼にたいして何か特別な感情を抱いたのだろうか。

嫌いではない。話しやすいし、彼の隣は居心地が悪いわけでもない。そもそもが、特別な感情、所謂、好きとはどんなものだろう。自分に問うてみたけれど、答えは出なかつた。糖分が援護をしたところで、答えを出すのは無理だといつ事くらいはわかつたけれど。

「千絵子さん」

「！ 佐藤君」

明日、と言われたけれど具体的に何も口約束をしていない状態だったから驚いた。友人と図書室へと移動する途中で、佐藤君が教室に現れた。出入り口に立つ私の隣に居る友人は目を丸くしている。

「良かった、行き違いになるといひだつたね」「どうしたの？」

「せっかく作つてもらつたんだし、いつしょに食べたいなと思って。お友だちさえ良ければだけど……」

佐藤君が首を傾げて私に告げる。ああ、そうか。弁当のことか。確かに同じ場所にいて、作った相手と作つてもらつた相手が別々に食べるのはどうぞ妙な感じもある。けれども、そんなに親しくして良いのだろうか。

周囲は、突然現れた私の存在に戸惑いを覚えるに違いない。佐藤君は同性愛者として有名であるとは言つたけれど、もちろん彼の姿にだつて起因しているのだ。私は恋路を邪魔する人間として、学校中から非難される可能性を孕んでいる。彼は、そのへんどう考えてるのだろう。

「……あのさ、聞きたいんだけど」

「！ あかり」

私が思考をめぐらしていくと、横に居る友人が声をあげた。横田 よじたあかり。私の数少ない友人のひとりである。ちなみに他校に恋人がいるからか、黒くまつすぐな長髪で佐藤君の隣に並べらくなっている彼女はしそつちゅう告白をされる。恋人がいるのだと断つても信じてもらえないことだつてしましばしだ。

「ちょっと、ちーー！」

「ほ？ おひー！」

間の抜けた返事をしてしまつたためか、拳骨を額にお見舞いされ悶絶すれば、佐藤君が千絵子さん！と名前を呼んで私の顔をあげさせむ。

「だ、大丈夫？ 横田さんて噂通りのキャラクターなんだね」

む？

私は良く、人とずれてるなんて言われたりもするけれど、こういふのは敏感なのだ。

気のせいじゃない。佐藤君の言葉、私に向けるものとは違つてどこか険のある空氣を出している。言いよつも、何か含んだようなものだし、そんなにわかりやすいものじやないけれどはつきりと敵意が感じられた。

なんでだかはわからんけど。なんで？……いかん、空腹では考えが纏まらんな。

「あら、その噂、どんなものかお聞かせ願いたいもんだわね」

そしてこの友人である。あかりは、自分に向けられる敵意やその他的事は私以上に感じやすいだろ。はつきりと、彼の挑戦状を受け取つたようだ。でもだからなんでこのふたり険悪なわけなの。ねめつけるような顔で腕を組みつつ、あかりは佐藤君を見やる。しかしそんな彼女の強い視線を真つ直ぐ受けているといつのに、佐藤君は春風の如くそれはそれは爽やかに微笑んで見せた。

「だつたらお皿をこつしょことつながらひてどつ？」

「名案だと思つわ」

「こつ」と笑んで発した一言に、あかりはやはり微笑んで応えた。ふたりの間に散つてる火花の意味は一体なんなのだろう。首を傾げつつ、ちらと腕時計を見やる。おつと、こうしてはおれん。

「おふたりさん、話が纏まつたんなら行こつうか。早くしないと皿を喰いつぱぐれるという事態になる。部室で食べよ。佐藤君、そこで良いかな？教室だと色々まずかね？」

私の言葉に佐藤君が頷くが早いが、私は歩を進める。正直、この空腹は耐えがたい。とつととの空白を埋めないことに、私は心が安まらない。

「……あの子、ほんと食事になると性格変わるわ。私のウインナ一まで奪い去つたくらいだし」

「……すごいね」

早足で目的地へと進みだした背後では、2人が半ば呆れたように言葉をこぼしていたらしいが、今の私の耳にはもちろん届いていない。昼食をとるのが最優先事項なのだから。

部室、というのは、実は私達ふたりしか在籍していない所謂、同好会だ。文芸部、ではないので文芸同好会。反対に、漫画研究同好会は人数が多く、漫画研究部として成立している。なんとも面白い話だ。先輩が卒業してしまって2人きりになった部室は少し寂しいが、その分気楽もある。元々、何の活動もしていなかつたから人が増えようと減らうと関係ない。

冬は少し寒い為、図書室で昼食をとるのだが、夏はこちらで食べる事も多い。同好会なので元々、資料室という名の倉庫だった教室をあてがわれており、恐らくは六畳と少し程度しかない、きちんと調べたら本当はもつとあるのかもしれないが体感的にはそう錯覚する、であろうと予想されるこの場所は、こじんまりとしたソファと机に、ひとつの中棚にびっしりと過去に制作された冊子や小説が置かれている。ちなみに電気ポッドが完備だ。

私と佐藤君は隣り合って、あかりは向かいのソファにそれぞれ腰かけた。

「……それで？あなた、千絵子に交際申し込んだってホントなわけ」「ああ、それは知っているんだ」

「昨日呼び出されたとき一緒に居たんだもの。戻ってきたら気に入るし理由は訊くでしょ?」「う

「まあ、そうだね。千絵子さんが言つたんだ?」

私をちらり、と見つめる彼の視線に少し驚いて、おかげを一瞬の間に詰ませた。いかんいかん。お茶を飲んで無理やり流し込む。すぐ隣に座つているから、距離が近い分なんだか過敏に反応してしまう。2人きりで話しているときよりも緊張するのは、あかりの前だからだろう。

「……あかりは友だちだし、まあ。まずかつたかな?」

でも、事情を話すつもりはない。あかりには申し訳ないけど、彼女に知られては色々と面倒な事もあるだろうし、そもそもこの歪な関係を彼女が認めてくれるとも思えない。私だって、もしもあかりがそんな事に巻き込まれたら止めただろうし、そんなの恋人ではないだけでただならぬ関係の友達と言われてしまつても仕方がないではないか。

そう、昨日、その事実に気が付いて私は打ちひしがれた。就寝前のベッドで、ひとしきり暴れて、やがてため息を吐いた。認める他のないという現実が、妙に残酷だと感じる。

私は、何がしたいんだろう。今更そんなことを思う。そんな醜い行為をしてまで、私は彼に協力して、得るものなんてないのに。自分はここまで、善人だつたろうか。ひょつとして昂君の素敵なあれこれにあてられてのぼせ上がっているだけなのだろうか。そうなるといよいよもつてあばずれでしかない。

一度、是と言つた以上、拒否するつもりはない。けれど、これまで良かつたのだろうかいう気持ちはやはり拭えない。彼とはすでに、思い出すだけでも恥ずかしいような接吻をしたのだ。あれ以上だつてひょつとしたらするかもしれない、正直想像できない。

いつかは別れる相手。いや、始まつてもいない相手。いつやつて
昼に訪れたのは、意外だつた。彼は、私と同じような考え方だと思つ
たから。

そんな佐藤君を見つめる。一応、事情は話さないよ、と田で訴え
てみた。

正しくそれを受け取つてくれたのかはわからないが、佐藤君はそ
んな私の視線を受けて、微笑んだ。

「実は、正式に付き合つ事になつたんだ。最初僕が勘違いしちやつ
たんだけど、昨日色々と話し合つた末にそういうことになつて」

「……そうなの？」

佐藤君が何を考えているかわからないが、怪訝な表情でこちらを
見るあかりの視線を受けて、とりあえず私は調子を合わせて頷く。

「あんた、別に佐藤君のファンでもなんでもなかつたでしょ。なん
でまた」

「ううーん、特に断る理由がなかつたから、かね。確かに好きかつ
て言われたらわからないつて感覚だけど、昨日一緒に帰つてみて、
話して、ああ隣に居るのはそう悪くもないなつて思つて」

私の言葉に佐藤君はしばらく田を丸くしていたけれど、やがて頬
を染めて微笑めば、ありがとう、と私に告げた。満面の笑みはきら
きらしていて眩しい。ああ、本当に綺麗だ。

そんな私たちの空気を一掃するように、じほん、とひとつ咳払い
をしたあかりは、呆れ顔で私を見たあとに、田を眇めて佐藤君へと
向き直つた。

「佐藤君。もはや噂でもなんでもなく、あなたが同性愛者って事は
公然の事実だつたと思つたけれど」

「うん、やっぱりそういうよね。佐藤君、どうするつもりなんだろ？」

多少、好奇心の混じった目で彼をみつめていれば、彼はさりと衝撃的なことを言つてのけた。

「僕はゲイなんじゃない。バイなんだ」

さすがのあかりも驚いたのだろう。口をあんぐりとあけて、間抜けな声をあげる。

「……はあ？」

「でもどちらかというとゲイ寄りだと思つよ。好きになる人は男性が多かったし。あと女の子は集団で騒ぐ子が多くて同年代はちょっと苦手なんだ。だから何人かに好意を告げられた時、もしまだそういう子があらわれたら申し訳ないと思つてそう言つた。僕も予想外だったんだ、同年代、学校で好きな女の子ができるなんて」

言つて、微笑みながら私を見つめる彼の瞳はとても甘つたるい。そんな顔で見られると、眞実ではないとわかっていてもなんだか気恥ずかしかつた。

私は思わず、難色を示そつと声をあげる。

「つあの、佐藤君、ちょっとこのタイミングで見ないでくれないかね

「そうそう、それ

なぜか私がやめろ、と言おうとしていたのに、佐藤君のがよほど不機嫌顔でこちらを睨むように見てきた。なんだというのか。

「どうして戻つてゐるの？昴つて、そつ呼んでつて言つたじゃない」「え、あ、『じめん。あのときはやの……なんかよくわからない感じで』

「あのとき？」

私の言葉に間髪入れずにおかりがつゝじんできた。しまつた、口が滑つた。

しかし私が慌てて口『じ』もる前に、昴君はひょりひょりとおかりの疑問に答えた。

「改めて告白したときだよ。あの時は、顔が真つ赤ですつ『じく可憐かつたんだ』

「ちよ、えと、す、昴君」

ふふ、と笑つて私の頬を撫でる手は、昨日より少し冷たい。といふか、あの時つていつのこと言つてるんだろう。もしかしてむにゅむにやした時のことじゃないのか。

考えれば考えるほど、私は混乱してしまつ。

きっと、今もある時と同じくらい顔が赤いんだろう。彼の言つているあの時と、私の思うあの時が合つていれば、そのたとえではあるが。

「……ふつさ。ま、どじまでが本当かどうかはわからないけど、佐藤君が千絵子を好きだつていつ点だけはどうやら本当みたいね」

あかりの言葉に、昴君は当然だよ、と言つて微笑む。私は、少し胸の奥が痛んだ。友人を騙してしまつた。それに、平然と言つてのけてはいるけれど、昴君だつて好きな人に対する裏切り行為を今宣言してしまつたようなものなのに。

私が悶々とそんなことを考えていると、それで、と昂君が真剣な表情で口を開いた。

「実は、お願いがあるんだけれど。僕らのこと、口外しないでもらえると助かる」

「まあ、そのほうがいいでしょうね」

ため息を吐いたあかりは、一言ですべてを把握したらしい。まあ、それはそなうなんだよね。

今は学校全体が昂君と幼なじみ、名前はそういえばなんだったろうか、を応援している雰囲気だし、そこにきてぼつと出の私が彼女になりました、なんて。色々な人間を敵にまわしそうだ。

それに。

昂君は正直、とても女性に好意を寄せられる機会が多い人間だ。端的に言えばモテる男の子。これだけ可愛い容姿と人柄ならばそつなるのもうなずける。であるからこそ、彼が今、女性とも関係を持てると言明してしまえば、外野はますます騒がしくなるだろう。私達のことは表立って言わないのが無難である。そもそもが、偽りの恋人なのだし、必要性を感じない。

「……でもいいの？ 佐藤君。この子、別に箸にも棒にもかからないような子じゃないわよ」

「それはもちろん、わかってるよ。だから、大々的に僕らと仲良くなつてもらおうかと思つてね」

「僕ら？ どういう意味？」

「僕と奏。かなでそれ同時に接触してもらえれば反発もそう起きない」

ふたりの話がいよいよ見えなくなつてきていたところに、昂君はこちらを振り返つて微笑む。

「千絵子さんは知ってるかな？僕の幼なじみ、奏つて言うんだ。高柳奏。^{やなぎ}そいつと僕と四人で仲良くなれば、そつそつ怪しまれない」

「……え、でも」

「大丈夫。理由はもう用意されてるよ。ねえ、横田さん？」

ますます微笑みを強くする昴君を私は心配になつてみつめる。そういう意味じゃないよ、わかつてるでしょうーでも、昴君は何も言わないし、この状況じゃ言えない。

そのときだ。

昴君が、私の手をきゅ、と握った。私は、驚いて一瞬反応してしまつたけれど、昴君の顔はあかりに向かっていたので、あかりは気付いていない。

私はなんとなく、その手を握り返す。すると昴君も、今までよりも強い力で私の手を握ってくれた。

忘れていた先程の彼の言葉を反芻して、私はあかりに顔を向ける。目の前の友人は、なんだか悔しそうに唇を噛んでいた。

「……あかり、どうしたの？」

「……少し前に話したでしょ、私の兄が結婚するって

その言葉に、私はああ、と頷く。あかりは、けつこう血他共に認めるブラコンで、結婚話が決まった時多少荒れた。けれど、相手の女性がとても良い人らしく、最近は晴れ晴れとした様子で敗北宣言をしていたものであつたが。それがどうしたというのだろうか。

「実はね、奏のお姉さんも、近々結婚するんだ」

「へー、それはまためでたい。……つておいおい、まさか

その言葉の意味をわからない私ではない。今は満腹だしな！

「そのままさかよ。……まさか、高柳君があなたの幼なじみだったなんて」

「元々、学校でも話しかけようとしていたみたいだし、接触してくるのは時間の問題だつたと思うよ」

憂鬱そうなあかりに、昴君が楽しそうに微笑む。どうしてあかりは、こんなに嫌そうな顔をしているのだろう。

「なんつか苦手なのよあの人。妙に明るいしなれなれしいし。他人との距離感を正しく取れない人間はどうにも疲れて」

「でも口実が出来れば、僕は他への牽制ができるから正直ありがたい」

「……私にメリットは何もないんだけど」

「僕は、強硬手段に出る事だつて考えてる。確かに、女子がどんな反応を起こすかは予想の範疇をそれこそ超えてしまうかもしないけど、千絵子を無防備にしておくよつはずつといい」

千絵子つて、ま、また名前呼ばれた。

どきりとして、繫いだままだった手を離そつとすれば、昴君はそれを許してくれない。

ただ握っていただけの手が、一本いつぽんの指を使って絡みとられる。指と指を交差して私達の手は先程よりも深く繫がると、昴君は指の腹をつかって私の手をゆっくりと撫でてくる。なんだかいやらしい手つきに、私は声をあげそうになつた。

「というかなんのだろ?」この手つきは。すごく抗議したい。

混乱に陥れられた私は、この時2人の会話の意味を全く考えられなくなり、話自体もあまりきちんと聞いていられなかつた。終始小刻みに動く彼の手が、どうにも気になつてしまつて。

あかりが鋭い瞳で昴君を睨みつけていた事も、それを受けた昴君が微笑んでいた事も、やはり全く気付いていなかつた。

「……脅すつもり？」

「 穏便に済ませたいだけなんだよ。僕だって、彼女を守りたい。傷付いてほしくはない。けれどそれ以上に嫌なんだ、他の男が千絵子を見るのが」

「まさか、そんなに独占欲が強い男だなんて思わなかつたわ」

「どうしても、ダメかな」

「……はー。わかつた、わかつたわよ。どっちみち、これから親戚付き合いもしなくちゃいけないだろうし、まあ、今から交流を深めて苦手意識をなくす努力をするのも悪くないわ」

「よかつた」

につこつと微笑んだ昴君の手が、やつと私から離れた頃には、2人の会話は終わっていた。

「……つて千絵子。顔真つ赤よ、大丈夫？」

「へいっ！？」

あかりの指摘にいっぴいっぴになつた私は、ますます顔を真っ赤に染め上げてしまつたらしい。覗き込んだ昴君が可愛い、と微笑むその顔に、ついに昴君のが綺麗だよ、と声に出して言つてしまつたのは醜態以外のなにものでもなかつた。

「まさか、あかりのお兄さんと昴君の幼なじみ……奏君だけ？の
お姉さんが結婚するなんてまたずいぶんとすごい偶然があるものな
んだねえ」

「そうだね」

ほへえ、と妙な声を上げつつ話す私に相槌を打つた昴君は、食べ
ている間ずっと誉めてくれていたお弁当を食べ終え、ペットボトル
のお茶を一口飲んでいる。ちなみに私は家から持ってきたものを持
参している。どうせ弁当用意するから、飲み物も一緒に用意するの
はそれほど手間じゃないのだ。

あかりは何を思ったか、居心地が微妙だから先に戻るわ、と言つ
て少し前に教室へ戻つてしまつたので、今はふたりきりである。な
んでだらうつ、さつきまでの変な緊迫感がなくなつて、だけー、と長
い息を吐き出してしまう。

「ずいぶん緊張してたみたい？」

「わかつた？」

あはは、と苦笑を漏らして再度短く息を吐き、私は話を続けた。

「あかりは鋭い人間だから……彼女に嘘吐くつてえらい緊張するん
だよねえ。まあ、罪悪感は別としてさ」

「そうだね」

私の言葉に昴君も首肯する。

「せつと横田さんは、ほとんど信じていないんじゃないかな」

彼の予想が確信かわからないその口ぶりに、しかし私は完全にそうだろうな、と考えていた。きっと、あかりは何もかも信じていないうだろ？。けれど何も指摘しないでいてくれたのは、彼女が私を信用してくれているからだ。心配していないわけでは決してないのだろうに、最後の判断を私に任せて、見守る役に徹すると、きっと無言で約束してくれたのだ。

友人の気遣いに少し心が温かくなると同時に、先程口にした罪悪感からか、ちくりと胸が痛んだ。

私がしばらく無言でいると、昴君も黙つて正面を向いていたが、やがて私の方へと振り返れば眉尻をきゅ、と下げて、なんとも情けない表情になつた。どうしたのだろう。

「……ごめんね」

「？」

「僕の嘘に付き合わせちゃつた」

その言葉に私は目を丸くして固まる。

いいよ、と言つて笑つてしまえば済んだけれど、私はそうできなかつた。だって私は、全然いいよ、と思えていないのだ。そこを曲げて口に出すのは、馬鹿正直かと言われればそうだけれど出来ず、結局無言で微笑むだけになつてしまつた。

決めたのは私で、けれども何がしたいのかわからないという感情はやはり同じで。

やっぱりやめる、と言つるのは簡単なのだけれど、昴君の内情を思えば、どうにもそれは言えなかつた。

もしも自分ならば、と。やはり考えてしまつ。

私ならば、あかりに恋心を抱いてしまうようなものなのだろう。私はそんな感情抱いたことないからわからない。けれどそうなつた

ら、きっとと考えても答えは出せずに、いくら大好きな糖分を摂取したところで、私の思考はそれ以上すすまないのだろう。

想い人に、自身の心を否定されるのは、一体どれ程の苦痛だろうか。

君は今、傷付いているのかい？なんて、訊けるはずもない。けれど、想像してしまうんだ。ない頭で、考えてしまう。そうなると、私は息が苦しくなって、彼をそこから解放できるのならば、協力したいと願ってしまったのだ。

綺麗なその顔が、歪み病んでいくのを、どうしたって見たくなかった。

私のその表情を見て、何を思ったのか、昴君は苦しそうに顔を歪ませた。あれれ、いちばん見たくないとか思っちゃってた表情されちゃった、なんでだろ？

私は疑問符を浮かべた顔でじっと彼を見つめ返していれば、やがて昴君の右手が私に近付いてきた。

長くもなく、短くもない。はっきりと黒でもなく、茶でもない。真っ直ぐといふほどでもないけれどくせつ毛まではいかない、何もかも中途半端な私の髪。

彼の手が、さらり、と私のそれに触ると、少しだけ隠していた私の顔をもつとはっきり見る為なのか、少しだけ取つて私の耳にかける。

手が耳に触れた瞬間、くすぐったさに私は肩をほんの少しだけ揺らした。

「……もしも」

「え？」

「もしも、本当に僕が、千繪子さんを好きだつて言つたら、どうする？」

「どうつて」

「あの時、僕の噂を知らなくて、ただ純粋に告白をされていたら、

「どうしてた？」

いちばん最初に、告白されたとき？

じつと見つめる彼の視線がなんともいえなくて視線をさまよわせつつも、私はなんとか口を開く。

「……断つてた、と、思つけど」

だつて、理由がない。

もしも昴君が本当に私を好きだと黙ってくれるならば、私も同じ気持ちを持つていらない限り応えてはいけない。人として、それは守らなければならぬことだと、思つ。

その答えに、昴君は苦笑して、ため息を吐く。なぜ、そんな悲しそうに笑うんだい。わかんないよ、昴君。

気付けば眉間に皺を寄せて考え込んでいた私は、持参していた紅茶を一口飲み込めば、ちなみにこだわりが特にないのでなんの種類かはわからないがでかでかと缶に紅茶と書いていたパックになつたものを購入している、なんとなく頭の中が冴えた気がした。少量だが甘味も入っている。

「……でも」

「一 千絵子さん」

静かにつぶやくように声をあげた私を、まじまじとみつめてくる昴君の顔を、私もじつと見つめ返した。

「……今だったら、どうかな」

「え」

「断つていたかもしれないけれど……でも、そのあとたとえば、私の存在を抹消されてしまったら、悲しいと思う」

「…………」

「廊下ですれ違つても、挨拶どいか田も合わせてくれなくなつて。気が付いたら小さく手を振つてくれたりとか。名前呼んでくれたりとか。そんのが、なんもなくなつたら、いやかなあ

「千絵子さん」

「あれなんかもう友だち気取り? やだねえ、こんな凶々しい奴じゃないはずなんだけど。『めんよつ、なんかきもち悪いねははは』

「千絵子」

「あれ?

言葉を遮られたと思つたら、なんか気付いたら抱きしめられてます?

「……昴君?」

「なんなのもつ……超かわいい

「え? いやあの、す」

名前を呼ばうとしたら、頬に唇が触れた。それに驚いて言葉を切れば、次に降りてきたのは唇へのキスだった。

キス、ではない。

でました。これは、接吻です。

息が苦しい。どうしたらいいのかわからない。じたばたしていると、昴君が唇を離して微笑んだ。

「鼻で呼吸すればいいんだよ」

くすくすと微笑みながらそつ耳元で囁く。ちょっと、くすぐったいですが!

というか多分そうだろうなとわかってるし苦しいからいくらかそうしてるんだけど呪りないんだよ結局一口を塞がれるってこれほど

苦しいのだね！

「それより、あの、なんで？」

「？ なんでつて」

息が整って、普通に喋れるよになつた私の質問に、昴君はわからない、といった風情でこてん、と首を傾げる。やめてください、可愛いです。

「だつて、どうしてキスしたの？ 必要ないんじゃないの？ だつてキスはもう大丈夫そつてわかつた、ん、でしょ？」

「……千絵子」

「くつ」

私の言葉がお気にならないのか。わからぬけれどやれやれ、といった感じでため息を吐きつつ首を振る昴君。なんなのですか、一休。

「僕は言つたでしょ。名実共に恋人のような行為がしたいって

「……言つた、けど」

「それはただ身体を触れ合わせるつて意味じゃないよ！ かわいいって言つてるのだって本心だし、抱きしめたいって思つた時じやなきや、僕はそういう行動に出ないよ」

ええー？ それって……なんか、よくわからない。普通の恋人とそれだとどう違うのか？

私が混乱しているのがわかつたのだろう。苦笑して私の頭をゆっくりと撫でる昴君は、とても優しく微笑んでいた。

ああ、また。

彼のこういった表情のひとつで、世界は止まる。時間が流れなく

なる。

「ねえ、別れるって前提で考えるのやめない？」

そんな中、彼の発した言葉の意味を理解するのに多少時間がかかってしまった。

数秒遅れて反応すれば、狼狽して一歩ずり、と後退する。しかし、そんな私の腕を、彼がしっかりと握った。ますます狼狽した私は、ふるふると数回首を振る。

「だつて、でも」

「お願い、千絵子さん。僕と恋愛の練習じよ。女の子とちゃんと付き合つた事つて、今までないんだ。だから、最初の相手は千絵子さんがいい」

「だから、練習なんでしょう？」

「ホールは、別れじゃないよ。いいじゃないか、たとえばこのまま付き合つても。どちらかが他の人間を好きになりでもしたら話は別だけど。僕は、いいかげん実らない恋にも疲れたんだ。卑怯だつて言われてもかまわない。忘れさせて、千絵子さん」

「昂君」

「千絵子さんの存在で、僕の秦への気持ちを全部忘れさせてしまうんだそれ。

ええと。ええと？

「ちょっと自動販売機」

「別に」「コアとか買い物に行かなくてもいいでしょ」

彼の言葉に、ぴくり、と反応する。立ち上がりかけた私の肩をつかんで留めさせるとは。いやつ。

「なぜわかったのかね」

「糖分、でしょ。いいじやない難しく考えなくたって。僕らは確かに仮の恋人かもしれないけど、いつか仮の部分がなくなる可能性だつてあるわけでしょう？」

「……昴君は、私のこと好きじやないでしょ」「うん」

「少しでも好意がなきゃ、一緒になんていたくないよ」

「ふーむ……」

眉間に皺を寄せつつ考え込む私に、にやり、と笑ってみせた彼の顔は、今までにない表情だった。

私の身体を引き寄せるとい、何を思つたのか私と共にじり、とソファに倒れこむ。

所謂、押し倒されている状態になつた。

「きっと、他の女の子だったら触れられないのかもしない」

「え？え、いやいやちょっと！」

言われた意味を把握する前に、昴君の手が私の身体をまさぐるつとする。

「昴君、ちゅうと、やめてー！」

「やだ」

その言葉に衝撃を覚えて目を見開く。昴君をつかがえば、真剣なその瞳と真正面から向き合つてしまつて、私はどんどん怖くなつてしまつ。

今は、彼の手が私の腕を力強くつかんでいた。

「おねがい、やめて」

かされたような声で呟いて、もう一度彼をみつめる。すると、昂君の瞳が揺らいだ。

……なんなのさ。その哀しそうな顔は、なんでなのぞ。

「……じゃあ、お願ひ。約束しよ?」

「…………やく、そく」

「さつきの話。僕たちは、お互いに外に好きな人が出来ない限り、恋人同士」

「でも」

「僕は、千絵子を道具として扱いたいんじゃないんだ。こんな風に、押さえ込んで、こんな行為だけを繰り返されるのなんて、嫌でしょう。」

昂君は、言つて、纏め上げた私の腕を解放すれば、ひとつ息を吐き出した。わからないけれど、どことなく自分自身に呆れているかのようなため息だ。

先程の乱暴な行為とは打つて変わつて、昂君は壊れ物に触るかのようにゆっくりと私の身体に触れた。それでも、さつきの記憶が残つてゐるからか、私はついついびくり、と震えてしまつ。

「……ごめん、怖かつたよね。ごめん」

「ごめんね」と謝罪の言葉を繰り返されながら、彼がゆっくりと私の頭を撫でる。掴まれていた手首が少し赤くなつてゐるのを確認すると、昂君は私の手を取つて赤くなつた箇所に唇を寄せた。

触れるだけのそれは何度も施され、その優しい行為にますます涙が出てくる。

「昂君、私は、なんか、駄目だった？」

私の涙混じりの声に、昴君は静かに首を振ると、起きれる?と言つて私の背中に腕を回すと、ゆっくりとソファに座らしてくれた。押し倒された相手に起これるとはこれいかに。

涙がたまつた情けない顔の私に困つた顔を向けながら、昴君は私の眦に口付けた。なんですかね、今日は皮膚接触が多いですね。

「泣かないで」

「泣かせないで」

反射で返した私の言葉に田を見開けば、昴君は「もつとも」と咳いて頃垂れた。その様子に多少は溜飲が下がる思いがすれば、私は小さく微笑む。

その表情に、昴君がやつと安心したかのように微笑を返した。

「泣かせたかったわけじゃないんだよ。ただね、さつきも言つたけれど、僕は千絵子さんを道具にしたいわけじゃないんだ」「私は別に道具じゃないよ」

「でも、僕となるべく学校で関わらないようにして思つてたでしょ?」

え。

「それだけじゃない。いつも他愛もない話をしたり、お昼を食べたり放課後の時間や休日の時間を一緒に過ごそうとか、そういうことだつてする必要がないって思つていたんじゃない?」

え。え。

ちょっとまで、なぜ知つている。

「わかるよ、反応見てればそのへり。今日、教室に来たときだつて心底不思議そうな顔してたし、横田さんの前であまり一緒にいるとい見られたくないんだなって思ったもの」

「……そうだけれどもさ。そのほうが色々と都合が良いんじゃないのかい」

「だから。最初、確かに僕はいつか別れるつて言つたよ、それはごめん。でもね、僕も、終わりを想定して関係を築こうと思つたら、やつぱり寂しいつて思うんだ。千絵子さんがそう思つてくれたように。だから、仮とかそういうのないとか、あまり考えすぎるのはやめようつて思つたんだ」

「昴君」

ぽかん、と間抜けな顔で見つめる私に微笑んで、昴君はふわりと笑めば、一瞬だけ触れる程度のキスを、私の唇に落とした。

な、ふいうちは、恥ずかしい！

真っ赤になつた私の顔に、微笑んで彼が可愛い、と告げる。だからそれも恥ずかしいのだが。

「僕たちは、まだ恋人つて堂々と言えない関係だと確かに思う。でも、いつか終わるんじゃなく、ここから始まるつて考えられないかな」

「……はじまる、ですか」

「うん。やつている行為は本当の恋人となんら変わらないんだし。行為に気持ちが追いつくよ、これからゆづくりと、お互いを知つていかない？」

「昴君は、それでいいの？」

「もちろん。良くなかったらこんなこと言わなによ。千絵子さんは？」

？」

気持ちが追いつくまで、仮の恋人。なんだかとてもややこしい話

だ。

「ちゅうと」

「自販機はいいから」

ちゅ。なぜわかる。

私はひとつ息を吐き出せば、覚悟するかのよひに、頷いた。

「わかつた。そつちのほづが、ずっと健康的だもんね。うむ、どん
といーー」

「……最後の宣言がよくわかんないけど」

ふふ、と笑つて、昴君は右手を差し出した。

「これから改めて、ようじくお願ひします、千絵子」

「… よ、りしく。す、昴」

私はされた行為を真似しただけなのに、呼び捨てにされた昴君は、
目を見開いてなぜか頬を染め上げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1799z/>

【全年齢版】好きです、付き合ってください。

2011年12月27日23時49分発行